
日本台湾学会 ニュースレター

The Newsletter of the Japan Association for Taiwan Studies

第 41 号

<目次>

巻頭言	… 1
特集 第 23 回学術大会を振り返って	… 3
学会活動報告	… 16

巻 頭 言

続・コロナ禍と学会運営 —第 23 回学術大会（オンライン）を振り返って—

日本台湾学会理事長兼大会実行委員長 松田康博

第 23 回学術大会もまた、延々と続くコロナ禍のため、5 月 29、30 日にオンライン形式で開催した。昨年に続き、今回の決定過程を会員の皆さんと共有したいと思う。

元々、第 23 回大会は名古屋市立大学での開催が予定されていた。しかし、実行委員長をお願いしていたやまだあつしさん（以下、全てさんづけで失礼します）から、昨年 12 月の常任理事会前に、「実施するなら名古屋に会員が集まれる時にやりたい。完全オンラインになる可能性があるなら名古屋でやる意味がないと思う」という趣旨の連絡をいただいた。一同深くそれに賛同し、完全オンラインに切り替えることにした。

実際、2021 年になると、東京で非常事態宣言下になかった時期は、9 月までの間わずか 1 カ月しかなかった。やまださんの判断は極めて正しかったのだ。通常に近い形で大会ができるかもしれないという淡い期待を抱いて、やまださんに依頼していた私は深く反省した。

問題は、学術大会の半年前に開催校と実行委員会が消失するという未曾有の現実と直面したことであった。たまたま、その直前の 11 月に、私はアジア政経学会のオンライン秋季大会実行委員長として、Webex Meetings を使ったリアルタイムのオンライン学術大会を実施したばかりだった。もはや「毒を喰らわば」の心境で、自ら大会実行委員長を兼務し、常任理事を中心に実行委員会を組織するしかなかった。ふとカレンダーを見ると、交流協会への経費申請締め切りが 2 月 19 日に迫っているではないか！

「SNET 台湾と共催で『台湾についてどう教えるか』というようなテーマで企画しましょうか？」と山崎直也さんは、いとも簡単に言ってくれた。自分の研究関心に基づき、この際思い切って公開シンポジウムを引き受けてくれる人はいないか、と実行委員会でアイデアを募った時のことである。

ただ、山崎さんは、財務会計担当理事であり、理事会・会員総会と重なるこの時期、そもそも超多忙である。それなのに、公開シンポの企画責任者、報告者まで引き受け、そしてVimeoを使ったあの高画質字幕付きのビデオを作成・編集・公開までしてくれた。このビデオはその後も継続公開されていて、学会の貴重な財産となった。この超人的リリーフピッチャーは、公開シンポを見事にピシヤリとやり遂げてくれたのだ。SNET台湾のメンバーである赤松美和子さん、洪郁如さんと合わせて、山崎さんには、本当にお礼の言葉もないくらいである。

次に、大会ホームページ作成という難所をクリアしてくれたのが、黄偉修さんである。黄さんは、研究の実力はもとより、事務能力も極めて高く、私が最も信頼する同僚である。通常の大会でもホームページ作成・アップデートは極めて煩雑な作業を伴うが、今回は、オンライン大会の実施要領をどのように間違いなく伝えるかというつかみ所の無い作業をしなければならなかった。それにもかかわらず、全てを猛烈なスピードでこなしてくれた。

五十嵐隆幸さんには、横浜大会での経験を見込んで会計を、ベテランの伊藤信悟さんには、論文の催促・回収の担当をお願いした。赤松美和子さんには、託児サービス担当+シンポジウムに関係する会計補佐を、冨田哲さんには企画委員長としてプログラム作成と分科会関係者との連絡に当たっていただいた。そして、総務担当理事の川上桃子さんには、主にスケジュール管理+発送物担当+書店担当をお願いした。川上さんには、とにかく困った時に相談に乗っていただいた。

それなのに、理不尽にも、今年もまた誰にもお会いして直接お礼を言う機会がない。実行委員を引き受けてくださったみなさん、本当にありがとうございました！

今回、政治学や国際関係の報告がそれほど多くなかったので、歴史学や文学の分科会に参加して報告や議論を堪能した。会員の皆さんには、昨年の書面方式に比べれば、よりライブ感がある学術大会になったことを実感していただけたのではないだろうか。

ところが、事後、何名かの会員が接続に失敗して参加できないという事例があったとの報告があった。事前のアナウンスの仕方など、私が作った文面に改善すべき点があったのかもしれない、大きな反省点である。この不手際について、この場をお借りして深くお詫び申し上げます。

来年は5月28日(土)、29日(日)に法政大学で、福田円さんを実行委員長として実施する予定である。またも不確実性の中での学術大会となるが、今回はオンラインとオフラインのハイブリッド開催ができないか、模索中である。会員の皆さんと久しぶりに顔を合わせて議論ができる大会を夢みたいと思う。さて、来年もまた「続・続・コロナ禍と学会運営」を書くことになるのだろうか。

<p>許雪姬著／羽田朝子・殷晴・杉本史子訳／A5判616頁／税込8800円 台湾人でありながら「日本人」でもあった彼らは、何故「満洲国」へ渡ったのか、現地でのどのような生活を送ったのか。オーラルヒストリーや資料を駆使して実態を描き出す。(台湾学術文化研究叢書)</p>	<p>離散と回帰 「満洲国」の台湾人の記録</p>
<p>黄進興著／中純夫訳／A5判482頁／税込5500円 孔子の末裔たちの私的な孔子祭祀が国家の祭祀系統に組み込まれていく過程や、儒家の道統に対する歴代の価値基準などを分析し、儒教史・儒学史の変遷を映し出す。(台湾学術文化研究叢書)</p>	<p>孔子廟と儒教 学術と信仰</p>
<p>黄進興著／工藤卓司訳／A5判338頁／税込5500円 如何にして孔子廟が中華帝国の礼制に組み込まれていったのか、ひいては政治に取り込まれていったのかを、孔子廟を巡る様々な歴史的事象を丹念にたどりながら考察。(台湾学術文化研究叢書)</p>	<p>孔子廟と帝国 国家権力と宗教</p>
<p>松崎寛子著／A5判304頁／税込5500円 日本統治期台湾や都市と地方の関係、環境問題を取り上げた作品を多く残した作家鄭清文の作品を緻密に分析する。</p>	<p>鄭清文とその時代</p>
<p>陳耀昌著／下村次郎訳／A5判440頁／税込2640円 一八六七年、台湾南端の沖合でアメリカ船が座礁し、一三名が原住民族に殺された。本書はこの「ローバー号事件」の顛末を、台湾原住民族を中心に、さまざまな視点から描く歴史大河小説である。</p>	<p>フォルモサに咲く花</p>

東方書店

ホームページ〈中国・本の情報館〉<https://www.toho-shoten.co.jp/> *価格税込
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-3 / 営業電話 03-3937-0300 / FAX.03-3937-0955



特 集

第 22 回学術大会を振り返って

<第 23 回学術大会オンライン公開シンポジウム>

台湾を学び、教える—台湾研究の成果をいかに社会に還元するか—

山崎直也（帝京大学）

企画責任：山崎直也（帝京大学）

司会：三澤真美恵（日本大学）

基調講演：呉密察（国立故宮博物院 院長）

報告：山崎直也、胎中千鶴（目白大学）、前原志保（九州大学）、陳文松（成功大学）

通訳：永吉美幸（台湾外交部）

第 23 回学術大会は当初、名古屋市立大学を会場に対面形式での開催を予定していたが、COVID-19 の感染状況が一進一退し、半年先の状況がまったく読めないことから、2020 年 12 月 6 日開催の第 11 期第 4 回常任理事会で、2 年連続となるオンライン形式への転換が決定された。これにより、公開シンポジウムのテーマも再検討となったが、同会議の席上、2018 年 9 月より日本台湾修学旅行支援研究者ネットワーク（SNET 台湾）共同代表として共に活動している赤松美和子会員、洪郁如会員と「台湾を教える」というテーマを提案し、基本的な合意を得た。

斯界の泰斗として大学及び社会教育機関で長年にわたり台湾史教育の最前線におられた国立故宮博物院的呉密察院長を基調講演者、呉院長の薫陶を受け、本学会で理事長も務めた三澤真美恵会員を司会者に迎え、日本の中高校生、大学生、市民、台湾の大学生・大学院生と、異なる対象に台湾研究の精華を届ける特徴的な取り組みを事例報告とするプログラムを作り上げた。台湾研究のアウトリーチを学術大会の公開シンポジウムのテーマにするという発想は、SNET 台湾が多数の日本台湾学会員の協力を得て、YouTube での動画配信やウェブサイト「みんなの台湾修学旅行ナビ」の制作といった形で台湾研究者と社会を切り結んできたことに加え、ここ数年、学術研究の各分野でアウトリーチ活動が重視され、本学会でも 2019 年に就任した松田康博第 11 期理事長がソーシャル・アウトリーチの強化を三大目標の一つに位置づけたという状況を踏まえている。

本学会の設立趣意書が示す通り、日本の台湾研究は、イデオロギー的・政治的中立性を確保すること、中国研究の下位分野ではなく、独立した地域研究として自らを確立することを当初より意識的に追求し、それゆえに強い研究志向を旨としてきたが、専門学会の創設から 20 年あまりの時を経て、研究の蓄積をいかに社会に還元するかが重大な議題となっている。本シンポジウムは、第 20 回学術大会シンポジウム「『新たな世代』の台湾研究」（2018 年）と共に台湾研究の新たなフェイズへの移行を示すものと言えるかもしれない。

実施方式について、当初は全編 Webex Meetings でのオンライン会議を想定していたが、第 22 回大会学術大会公開シンポジウム、SNET 台湾の動画配信の経験を踏まえて、講演と報告からなる第 I 部は事前録画した映像を Vimeo で定時配信し、質疑応答の第 II 部を Webex Meetings で実施することにした。シンポ当日、第 I 部については、Vimeo とサブで同時配信した YouTube を合わせて 300 以上のアクセスがあったが、第 II 部の参加は最大で 150 名程度にとどまったので、Webex Meetings への接続がうまく出来ないという方もおられたのかもしれない。第 II 部がやや駆け足で、寄せられた質問に答え切れなかった部分があったため、司会の三澤会員と事例報告者 4 名で特別編の収録を行った。事後、第 I 部は一般公開、特別編は日本台湾学会員とシンポジウムの事前登録者限

<分科会企画>
第1分科会
自由論題（歴史学）

湊照宏（立教大学）

座長：湊照宏（立教大学）

報告1：黒羽夏彦（成功大学・院生）

「アジア主義者の台湾関与—『台南新報』成立の背景と熊本系人脈」

報告2：曾耀鋒（台中科技大学）、米山高生（東京経済大学）

「植民地台湾における大成火災の経営：ビジネスにおける台湾人と日本人の結節点」

コメンテーター：許時嘉（山形大学）、北波道子（関西大学）

黒羽夏彦報告「アジア主義者の台湾関与—『台南新報』成立の背景と熊本系人脈」では、『台南新報』創刊過程における日本のアジア主義者の関与について検証された。1900年創刊の『台南新報』は、日本統治期台湾における三大紙の一つに数えられるものの、その創刊過程に関する研究は空白となっている。本報告では、まず同紙のルーツが『九州日日新聞』にあったことに注目し、台南新報社成立の背景には熊本の紫溟学会や上海の日清貿易研究所などアジア主義者の人的ネットワークが関わっていたことが強調された。さらには、熊本の紫溟学会が台湾へ関係者を送り込んだ動機には、アジア主義に基づく貿易振興構想と南進論的な植民開拓構想があり、この二つの方向性の結節点として台南の地政学的位置が意識されていたことなどが主張された。

黒羽報告に対するコメンテーターの許時嘉（山形大学）からは、日本統治初期台湾における熊本国権派の人的ネットワークという新しい視点が導入されていることを、本報告のまず評価すべき点としてコメントした。そのうえで、人的ネットワークという分析枠組みが有する方法論としての限界は認識されるべきだ、という趣旨の指摘がなされた。この、アジア主義という思想と新聞会社の経営実態との関係をより慎重に考察しようとするコメンテーターからの指摘は、質疑応答時における台南新報社の経営実態に関する複数の質問を招き、議論の活性化につながった。

曾耀鋒・米山高生報告「植民地台湾における大成火災の経営：ビジネスにおける台湾人と日本人の結節点」では、大成火災の創業者である益子逞輔の口述自伝と台湾人大株主である林献堂の日記を用いて、同社におけるトップマネジメントの攻防（台湾人株主社長の就任と更迭）や、それにとまなう企業内部ガバナンスの変遷について検討された。その過程で、資本では台湾人に依存しつつも、販売市場においては日本に依存する経営状況であったことなどが報告された。

曾耀鋒・米山高生報告に対するコメンテーターの北波道子（関西大学）からは、本報告は、基本的に台湾人が所有（資本）を握りつつも、経営は日本人が握っていた企業のケーススタディであるとして高く評価された。そのうえで、一般的な大企業分析で用いられる概念「所有と経営の分離」に対して、本報告サブタイトルにある「結節点」の持つ具体的意味についてより詳細な説明がなされるべきだ、という趣旨の指摘がなされた。この指摘は、分析対象である大成火災が特殊ケースであるのか一般ケースであるのかを慎重に判断しようとするものであり、質疑応答時における他社ケースに関する議論につながった。

それぞれの報告、コメント、質疑応答が実りあるものとなり、司会に専念する座長にとっても大変有意義な第1分科会となった。

第2分科会
自由論題（文学）

李郁蕙（広島大学）

座長：李郁蕙（広島大学）

報告1：呂美親（台湾師範大学）

「1990年代の台湾語『同性愛小説』—陳明仁の『詩人の恋物語』を中心として」

報告2：謝惠貞（文藻外語大学）

「在日台湾人作家李琴峰『独舞』研究」

コメンテーター：三須祐介（立命館大学）、劉靈均（相模女子大学）

第2分科会では文学に関する2つの自由論題報告が行われた。1人目の報告者は呂美親会員で、題目は「1990年代の台湾語『同性愛小説』—陳明仁の『詩人の恋物語』を中心として」である。2人目の報告者は謝惠貞会員で、題目は「在日台湾人作家李琴峰『独舞』研究」である。

まず呂会員の報告では、1990年代の台湾語文学運動における陳明仁の役割及びその作品「詩人の恋物語」の意義について分析された。結論として、陳は「文字面」において当時最新のパソコン技術「TW301 输入法」を駆使して台湾語の文字化に貢献したこと、「文学面」においてポストモダンや同性愛運動などの文学潮流に乗りながら台湾語歌謡曲をふんだんに使って台湾語小説の新境地を拓いたこと、その実践の成果が「詩人の恋物語」であると説明された。

これに対して、コメンテーターの三須祐介会員からは次のような指摘がなされた。要点だけ略述すれば、①「詩人の恋物語」が描く「同性愛」と「異性愛」の不均衡さ、②同性愛者として韓国／人が設定された背景、③台湾語歌謡曲に交じって日本語の歌が言及される意味、④陳が手掛けた『台文BONG報』及び「詩人の恋物語」の読者層について、という4点である。一方、フロアの方では、森保純会員より日本語の歌が登場する場面についても具体的に紹介してほしいという旨の発言があった。また、垂水千恵会員からは台湾語の歌やその後の台湾語文学運動について、劉靈均会員からは読み手の問題についてそれぞれ質問があった。

以上の質問に対して、呂会員は「詩人の恋物語」の性的描写と政治性についてもっと深く掘り下げ、特に日本と韓国の持つ意味合いを明らかにしていきたいと回答した。また、台湾語や日本語の歌謡曲が台湾語文学の発展にどのような影響を与えたかを明らかにすることも課題の一つであるという認識を示した。そして読者層の問題について、需要（読者）に対する考慮よりも、供給（制作）を先んじた側面があったのではないかと回答した。

次に、謝会員の報告では、女性・LGBT・移民という三重のマイノリティの立場にある作家の李琴峰が、「独舞」という作品の中で、ジェンダー・アイデンティティが生み出す連帯感と限界をいかに描いているかが考察された。謝会員は、「文化翻訳」や「自己翻訳」などの翻訳理論を援用しながら「独舞」の日本語原作と中国語訳の異同を比較したうえで、同作は、ジェンダー研究とクィア理論に基づいて戦略的に文化本質主義を使用したテキストであると結論付けた。

これに対して、コメンテーターの劉靈均会員は、「文化翻訳」の定義からルビの使い方、コーパス分析の有効性にいたるまで幅広く質問したほか、「独舞」に、同じく彰化出身の女性作家邱妙津と邱の友人である頼香吟の影響が見られることや、村上春樹のテキスト引用という観点の新鮮さを指摘した。一方、フロアからは、藤井省三会員より、「自己翻訳」を行う作家は少ないいうえに、フェミニストの間で村上作品は高く評価されないなかで、日台文学史における李の位置づけをどう考えればいいのかという質問があった。また、垂水千恵会員は、「自己翻訳」と「文化翻訳」の定義を明確にしたうえで両者を区別して使用すべきだと指摘するとともに、李は邱妙津『ある鱶の手記』のルビの振り方を真似した可能性があるかと述べた。

以上の質問に対して謝会員は、「文化翻訳」の定義については、これまで一貫して、「振り仮名」と注釈によって異言語の「音」「形」「意味」などを表記する方法を念頭においてきたと説明した。また、邱や村上の影響については、李琴峰本人のインタビューや愛読書などからも確認できるため、今後さらに具体例を挙げて考察していきたいと回答した。

第3分科会
自由論題（歴史社会学・政治学）

清水麗（麗澤大学）

座長：清水麗（麗澤大学）

報告1：張瑜庭（大阪大学・院生）

「NHK 中国語講座のテキスト問題—「二つの中国語」をめぐる議論」

報告2：鶴園裕基（早稲田大学）

「1950年代の台湾入境管制と『中国難民』問題—出入境法規と出入境統計からの分析—」

コメンテーター：藤井久美子（宮崎大学）、楊子震（南台科技大学）

張瑜庭報告は、1967年に開始されたNHKテレビ中国語講座のテキスト内容を詳細に分析することによって、テレビ講座開始当初から、簡体字とローマ字ピンイン表記及び地名表記等中国大陸のものが採用されて中華人民共和国の情報が大いに盛り込まれる一方で、繁体字が併記されるという「二つの中国語」状況があったことを明らかにした。1970年、「中国」・「中国語」とは何を指すのかという問題提起をきっかけに、学者、担当講師、学会、そして政治家を巻き込む論争が勃発し、最終的にNHKは「普通語」を教えることを原則とした。政治外交上の転換よりも早いタイミングで、日本の中国語教育における「中国語」・「中国」は、学会や講師の意見を反映する形で「普通語」・「中華人民共和国」となっていたのである。

コメンテーターの藤井久美子（宮崎大学）会員は、本報告は、中国語教育という場での「二つの中国」をめぐる日本の社会状況を扱った重要な研究であるとしつつ、報告の内容及び実証性をさらに高めるために、NHKと政府との関係、中国語学会等の状況をさらに調査する必要があると述べて、関連資料についての指摘や提示を加えた。続いてチャットを通じた参加者の質疑・コメントでは、外交関係のあった中華民国の「国語」は、日本では50年代からすでに重要な位置づけにはなく、その頃には「普通語」を軸とする「一つの中国」状況があったのではないかという指摘、またラジオ講座との関係や韓国語などとの比較可能性についての指摘がなされ、参加者の中国語学習体験をふまえて熱い議論が展開された。

鶴園裕基報告は、出入境法規と出入境統計の分析によって、台湾に入境を許可された人々と、許可されなかった「国外居留民」とを分ける選別が50年代も続いていたと指摘した。ここでは、軍人及びその関係者が入境申請手続きを免除されて台湾へ渡り、国軍に編入されたこと、その一方でこの管制は民間人に対して、台湾にとっての有用性という観点から人を選別する機能を果たしていたことなど、興味深い実態が報告された。

コメンテーターの楊子震（南台科技大学）会員からは、人の動きの管制という観点から本研究の重要性が強調されるとともに、①「中国難民」の定義をめぐる、馬英九ら当事者と社会の認識のずれ、②比較的安定して社会に存在し得た在日華僑と朝鮮半島のように不安定な状態に置かれた華僑の存在を分ける必要性、③引揚者という台湾を出た人々に対する分析の必要性などが指摘された。さらに、出入国管理という観点からの研究が、従来の台湾政治や政治体制研究に対してどのようなチャレンジになるのかという大きな問いも投げかけられた。現在、台湾でさらなる資料収集を展開することには大きな制約はあるが、インタビューを含めた今後の調査によって、「中国難民」の定義の明確化な

ど、より精緻な分析が求められる一方、本研究に対しては、「台湾」がどのように形成されてきたかという大きな命題につながる期待も寄せられた。

二つの報告は、1950年代台湾の「境」形成や70年代初頭までの中台をめぐる日本社会の実態を解明しようとした結果、政治外交領域での日台関係や中華民国の台湾移転をめぐる台湾社会の変容などについて、新しい課題を提起するものとなった。チャットによる議論は報告をめぐる質疑応答という枠組みを越え、30名以上もの参加者が相互に意見交換する場ともなり、自由闊達な議論の場がなかなか作り出せない社会状況のなかで、意味のあるものとなったのではなかろうか。もっとも、そうした意見や情報の提起が活発に行われたのは、二人の報告者の提起した課題と内容がそれだけの重要性と新しい視点への可能性をもっていたからであろう。

第4分科会（文学）

予定調和のためのジェンダー・ポリティクス
——1950年代のラジオ放送および近年のLGBTQ映画

張文菁（愛知県立大学）

企画責任者：赤松美和子（大妻女子大学）

座長：張文菁（愛知県立大学）

報告1：張文菁「1950年代台湾語ラジオ放送にみる語りと歌謡曲の融合」

報告2：赤松美和子「台湾LGBTQ映画における子どもをめぐるポリティクス」

コメンテーター：垂水千恵（横浜国立大学）、白水紀子（横浜国立大学）

第4分科会は文学をテーマに行われた。娯楽性を重視した作品では、一時的に社会的価値観から逸れつつも、最終的には、誰もが認める関係に収まる結末を持つ傾向にある。それを、フランク・カーモードは「既成のコンベンション／慣習や約束事」として分析した（『終わりの意識——虚構理論の研究』国文社、1991年、30頁）。本分科会ではそれを「予定調和」と呼び、多くの人びとを取り込む戦略としての「予定調和」が、異なる時代のラジオおよび映画でどのように描かれたかについて分析した。

第1報告者である張の発表は、1950年代の中国語図書市場から周縁化された台湾語話者が、いかに娯楽に接続できたかという問題意識から出発した。報告では、まず戦前の台湾から発展したラジオ放送の歴史を振り返り、次に戦後の民営ラジオ局において台湾語娯楽番組の比重が次第に増加したという、近年の研究成果を整理した。その結果、50年代には、ほとんどの民営ラジオ局において、放送時間の5割以上を台湾語ラジオ番組が占めるほど隆盛を誇っていたことが確認できた。

数多くの番組のうち、本報告が目にしたのは、台湾語歌手として知られる洪一峰が兄の洪徳成とともに立ち上げた「台語流行歌曲（天声音楽歌謡研究会）」である。民声ラジオ局から90分間の枠を借り受けたこの番組において、洪徳成は自作の『美麗的情仇』（彰化：新生出版社、1956年）および『愛的聖典』（台北：万華書店、1957年）を台湾語ラジオ小説として放送した。まだ録音の機材が普及していなかった当時において、実際の番組進行の様子は不明であるが、調査した資料から、物語は、男女が唱和する台湾語歌謡曲の合間に差し挟まれた語りと融合しながら、寸劇の形で放送されたと推測した。のちに洪徳成は、「歌仔戯」を引き合いに出してこのような形式を「台湾語ラジオオペラ」と称したうえで、これが聴取者の人気を集めたことを記述している（「值得重視的台語廣播歌劇」『聯合報』、1958年4月12日）。物語を台湾語歌謡曲とともに語る手法は、同時期にはじまった台湾語映画にも踏襲され、60年代末まで大いに流行したのである。このことから、洪徳成らによるラジオ番組は、台湾語映画と歌謡曲の融合を予見したものだと言える。

コメンテーターを務めた垂水千恵会員は、洪徳成が日本に滞在した際に入出入りしていたという、浅草「笑の王国」に関する情報を提供したほか、そのメンバーであった古川緑波および菊田一夫の影響、さらに戦前の台湾で流行した『可憐な仇人』（阿 Q 之弟、1936 年）、『台湾の女性』（呂赫若、1940 年）などメロドラマの系譜にも目を向けるべきだろうと指摘した。

第 2 報告である赤松の発表は、約 30 年間に公開された主な現代台湾 LGBTQ 映画を分析対象とし、2000 年以前、2000 年代、2010 年以降の各時期の作品における家族や子どもに関する表象を比較検討し、その変遷を読み解いた。その結果、2000 年以前は、息子と父との関係がテーマであった台湾 LGBTQ 映画は、2000 年代には、父母も子どもも登場しない「キラキラ青春映画」となり、2010 年代は、父の不在を継承しつつも、いずれも次世代としての子どもが登場していることを明らかにした。特に 2010 年代の作品のエンディングにおいて、LGBTQ の親のもとで育った子どもたちの幸福な姿が表されていることに注目し、それは多様な家族形態の提示である一方、その背景には、同性婚合法化に反対する運動における宣伝活動や少子化問題など家族への関心の高まりもあるのではないかと分析した。

コメンテーターの白水紀子氏からは、「多様な家族像の提示」や「子どもは宗族に限定されない形で次世代として登場」といった報告論文の記述について、作品に沿ってもう少し具体的な解釈が欲しいとの指摘があった。フロアからは、今回取り上げた大衆映画だけではなく、インディペンデント映画にも注目してみてもどうか、また、子どもがいれば幸福であると強調しているようにも思われる点に対して批判的な考察が必要ではないかといった示唆的な意見が多数寄せられた。

第 5 分科会 自由論題（文学）

倉本知明（文藻外語大学）

座長：倉本知明（文藻外語大学）

報告 1：李星雨（一橋大学・院生）

「朱天文のナショナル・アイデンティティー変容——『日神的後裔』創作の中断から見る」

報告 2：伊蒙楽（一橋大学・院生）

「呉濁流の大陸経験を再考する——1940 年代南京汪精衛政府に関係する台湾人を手がかりとして」

コメンテーター：池上貞子（跡見学園女子大学）、山口守（日本大学）

第 5 分科会では、文学をテーマに 2 つの報告が行われた。李星雨会員は朱天文が 1992 年に発表した小説『日神的後裔』の創作中断を通じて、そのナショナル・アイデンティティーの変容を分析し、伊蒙楽会員は 1940 年代における南京汪精衛政府に関係した台湾人の足どりを手がかりとして、呉濁流の大陸経験を実証的に分析してみせた。

まず、李星雨会員の報告では『世紀末の華やぎ』と『荒人手記』の間に書かれた朱天文の『日神的後裔』の執筆がなぜ中断されたのか、およびそれが作者自身のナショナル・アイデンティティーの変容といかに関結していたのかについて述べた。李星雨会員は、「日神」を戦後アメリカに移住した宋美齡として読むことで、「日神」の後裔たちが感じる疎外感を明らかにし、1990 年代初頭における朱天文のナショナル・アイデンティティーの揺らぎを読み解いた。これに対して、コメンテーターである池上貞子会員は、「日神」の後裔が宋美齡個人を指すのではなく、台湾も含めた中国系女性の群像を描こうとしたのではないかと述べ、朱天文とも深い関係のあった胡蘭成の「女人論」、「中国的な女人」とのつながりについて指摘した。その上で、『日神的後裔』はナショナル・アイデンティティーの問題というよりもむしろ 1980 年代以降に活躍した台湾人女性作家（施叔青、李昂、平路、

蘇偉貞、邱妙津)たちとの関係の中で言及されるべき女性のエクリチュールの問題ではないかといった疑義が提出された。

一方伊蒙楽会員の報告では、1940年代の南京汪精衛政府における台湾人の足どりを探るといった実証的な歴史研究に関する報告が行われた。呉濁流研究の多くがこれまで『アジアの孤児』などのテキスト研究に集中していたことを述べた上で、伊蒙楽会員は、鍾壬壽、彭盛木、黄自強といった当時南京汪精衛政府で働いていた背景の異なる台湾人たちの経歴を調べることで、呉濁流の大陸経験を浮かび上がらせようとした。分析にあたって、鍾壬壽の『友善抗日70年』などこれまで未発掘であった資料を引用するなど、呉濁流研究に関して新たな発見とも言える内容も提出された。コメントーターの山口守会員は、こうした新たな資料の発掘をまとめたことに加えて、南京時代に呉濁流と対立した市来義道が実は帰化した在日朝鮮人であったことを指摘した箇所について、植民地出身者が「中国人」/「日本人」という身分をめぐって対立する構図の中にJapanese-nessの虚構・偽善性が浮かび上がっていることを高く評価した。その一方で、同時に創作時期・意図・視点・言語・読者想定が異なる呉濁流のテキストが非常にメタフィクショナルであることを述べ、そうしたメタ記憶的である呉濁流の文章を扱う際には、論考においてまず叙述方法論について説明することが求められるのではないかといった疑問を呈した。また、フロアからも当時台湾人が自らの身分を隠すことは、大陸だけでなく日本でも同様に行われたことが指摘され、数百年前に日本に連れてこられた朝鮮人の末裔である市来義道が、戦後在日朝鮮人としてのアイデンティティを主張したことの特殊性などについて述べる声も上がった。

自由論題であった第5分科会において、2つの報告は必ずしも密接な連関をもつテーマを扱っていたわけではないが、謝・伊両会員の報告はいずれもこれまで十分に研究がなされてこなかった分野に新たに鋏を入れるものであって、今後の展開が大きく期待される。

第6分科会

自由論題(宗教学・文化人類学)

宮岡真央子(福岡大学)

座長:宮岡真央子(福岡大学)

報告:陳宣聿(大谷大学)

「現代社会における胎児観の変遷—台湾の「嬰霊慰霊」を通して」

コメントーター:三尾裕子(慶應義塾大学)

陳宣聿会員の報告は、台湾で1980年代中盤以降行われてきた「嬰霊」(流産、死産、中絶された胎児や夭逝した子どもの霊)を慰霊する儀礼を主題とし、日本の水子供養が伝来したとみる先行研究から視点を切り替え、胎児観の変遷が儀礼にもたらした影響に着眼し、特に死者救済儀礼の側面から「嬰霊」の位置付けを検討した。具体的には、まず出産の医療化による「胎児」の客観的認知および中絶合法化と反対運動という社会背景を確認したうえで、台湾社会における「嬰霊」概念の発生、そしてこの概念に含まれた新奇性、異質性が徐々に消失したことを指摘した。次いで、過去に漢民族が死した嬰兒の遺体を特殊な方法で処理することにより親子関係を否定してきたことをふまえ、現代の「嬰霊慰霊」が親子関係を承認し修復しようとする性格をもつことを論じた。そして、漢人靈魂観の「神、鬼、祖先」という古典的図式に照らし、今日の廟における宗教的職能者による嬰霊慰霊がA) 期間限定の祭祀、B) 個別の依頼に応じた「超度」、C) 年中行事に組み込まれた「超度」という3種に分類でき、それらはいずれも祖先祭祀の原理では処理しきれない「浮かばれない死者」に対応する儀礼として行われていると結論した。

コメンテーターの三尾裕子会員からは、陳会員の研究は、先行研究の稀少なこの主題に関する従来の認識を大きくあらためる画期的なものであるとの見解がまず示され、以下の問いが提示された。

1) 日本との共通性の有無や儀礼が行われる比率。2) 論文中の「嬰霊」「新しい死者」「往生」「位牌」などの概念の詳細。3) 三種の儀礼の関係、AとBはいずれCへ移行すると考えるべきか否か。4) 「嬰霊」とはそもそも「崇る」ものではなかった存在が新たに「鬼」とみなされるようになった、もしくは「鬼」の新たな下位分類として現れたと理解してよいのか、あるいはそれらは「冥婚」「過房」の対象となる未婚死者の範疇にもともと含まれるものだったのか。そして、日本では1970年代の水子供養でなされた「崇る」という語りは次第に減少・変容したが、台湾の場合はどうか。また、来聴者からは次のような質問も出された。胎児の生命観の変化にともない観念されるようになった胎児の「霊」とはどのようなものか(植野弘子会員)。嬰霊慰霊の動機としての「崇る」という認識は、人々の語り、「超度」儀礼からの観察など何を根拠としたものか。また、子どもの性別により儀礼のあり方に相違はあるか(上水流久彦会員)。これらの問いを受けて、報告者は特に胎児の生命観の変化と「霊」の概念との相関性について、「嬰霊慰霊」の導入で知られる龍湖宮の儀礼以前にも中絶した子どもを扱う儀礼が存在したことなどから、台湾社会の諸変化にともない人々が胎児に霊が宿るとみなすようになり、儀礼を願うようになったのではないかと回答した。また、日台の比較については、今日の日本の僧侶は「水子は崇らない」と語るが、台湾の道士は今なお嬰霊が崇る存在だと語り、また儀礼依頼者の動機でも崇りを挙げる人が一定数存在するという違いが示された。これらの応答をふまえ、沼崎一郎会員からは、ここでいう「霊」がどのようなもので、人類学における漢人靈魂観の古典的図式「神、鬼、祖先」とどのように異なるのかについて、儀礼を行う人々にとっての意味、人類学・宗教学的にとらえた場合の意味という2方向でさらに精緻化・明確化する必要性が説かれた。また、今後の比較研究についても助言が加えられた。

以上のように本分科会では、比較的新しい信仰・儀礼であり従来多くは論じられてこなかった現代台湾の「嬰霊慰霊」について、具体的事例をふまえ、「神、鬼、祖先」という古典的図式をも参照・検討した、たいへん意義深く刺激に満ちた議論が行われた。今後の研究の展開を大いに期待したい。

第7分科会(教育学・社会学)

台湾の「大学社会責任実践計画(USR計画)」における大学教育と社区発展(Community development)の連結——長栄大学「綠色社区根與芽行動計画」を事例に

佐々木孝子(長栄大学)

企画責任者: 佐々木孝子(長栄大学)

座長: 佐々木孝子(長栄大学)

報告1: 洪慶宜(長栄大学)

「綠色社区根與芽行動計画」の実施状況及びその成果(英文。報告は中国語、日本語通訳有)

報告2: 佐々木孝子(長栄大学)

「社区营造の視点から見る「大学社会責任実践計画(USR計画)」における大学の役割」

コメンテーター: 山崎直也(帝京大学)

第7分科会は、日本台湾学会では北海道大会(第12回、2010年)以来二度目となる戦後教育を主題とした企画である。台湾のUSRに関しては、日本台湾学会のみならず、日本でも恐らく最初のまとまった報告であったと思われる。

少子化・規制緩和等に伴う大学への競争原理の導入や、気候変動やグローバル化がもたらす課題の解決に高等教育機関が果たす役割への期待等から、大学の社会的責任ということが言われるようになった。USR (University Social Responsibility) は、そうした社会的背景の下で 2000 年以降使われるようになった新しい用語である。ヨーロッパ或いはアジアを中心に USR に関わる大学間ネットワークが形成されたり、国連の SDGs と USR とを関連づけた議論等、USR は国際的にも広がりを見せている。台湾では 2017 年に USR を導入し、試行期を経て 2018 年から本格的に「大学社会責任実践計画 (USR 計画)」を実施し、現在に至っている。台南にある私立の長栄大学では試行期から継続して USR 計画を進めており、本分科会においては、同学に籍を置く 2 名の研究者による実践報告がなされた。

日本では USR の用語が一般的に使われないことから、佐々木報告ではまず USR に関して先行研究をレビューして世界的な研究動向を紹介し、USR が、国、大学の運営部門或いは研究・学術部門等で、状況により多義的に定義されて使用されているとした。また、教育改革の延長線上に位置づけられるとはいえ、USR は政府の補助金事業として実施され、少子化や規制緩和の進展で大学の存在意義が問われるなかで、現在の社会・経済状況においては大学の経営戦略として扱われる側面が大きいことを述べた。これに続いて、台湾政府が進める USR 計画について、「在地連結・人材育成」を軸とするコンセプトや採択状況等の概要を説明した。

それから洪報告にうつり、長栄大学での実践が詳細に紹介された。まず洪氏が 20 年来継続している市民参加型の河川環境保全活動、実践的な環境教育の教養科目への導入、こうした環境教育を契機とした国際交流及び国際的な人材の育成を目的とする新学部の設置等が紹介され、USR 計画採択に至るまでに、地域連携と国際的な実践の蓄積があったことが示された。その後、USR 計画において、地域との橋渡し役として USR 事務室がキャンパス外に設置されたことをはじめ、公開講座等の地域連携活動・問題解決型学習を採用し、地域でフィールドワークを行う科目の実施、留学生によるインターンシップや英語教室の実施による地域貢献等、「在地連結・人材育成」を実現する実践が行われていることを報告した。

ここで再び佐々木報告に戻り、「在地連結」に注目した報告が行われた。「在地連結」は台湾 USR のコンセプトの一つであり、大学が USR の取り組みとして最も多く選ぶテーマである一方、政府や台湾の研究者によりしばしば社区营造 (台湾における参加型地域づくり) と関連付けて使用されることもある。この報告では、USR 科目を担当する大学教員、大学が連携して活動を行う地域住民及び小学校教員へのインタビューを実施し、USR 計画を社区营造の視点から考察した。インタビュー結果から、USR 活動の評価が大学の知的及び経済的資源の提供にあることを報告し、本事例における社区营造とは大学の開放であると位置づけた。

コメンテーターの山崎氏からは、台湾の USR の世界的傾向における位置づけ、兩岸四地における USR の展開等について聞かれたほか、カリキュラム構成や教員のインセンティブ等、長栄大学での取り組みに関する質問がなされた。フロアからは、USR 計画を支える経済的資源に関する質問、及び佐々木報告に関連して社区营造についての追加説明を求める質問があった。また山崎氏からは、氏が一員として進める「台湾修学旅行」と長栄大学との連携の可能性についても言及があり、長栄大学からは地域住民と共同で作成した地域歩きマップが紹介され、将来連携の可能性があることが示された。

第8分科会
自由論題（歴史学）

北村嘉恵（北海道大学）

座長：北村嘉恵（北海道大学）

報告1：小野純子（金城学院大学）

「日本統治末期、台湾先住民の島内軍事動員—特設警備第514大隊の分析」

報告2：楊素霞（政治大学）

「民主化移行期・台湾における「明治維新」論の再構築」

コメンテーター：王麒銘（台湾師範大学）、家永真幸（東京女子大学）

本年度の第8分科会では、第二次世界大戦末期および民主化移行期という、歴史学領域においては相対的に蓄積の乏しい時期を対象に据えた報告が行われた。各報告の意義および課題については、各コメンテーターの視点から以下のようにとりまとめていただいた。司会（座長）としての所感を添えて報告とする。

(1) 小野純子報告は、植民地防衛体制の中で島内の先住民がどのように動員されたかを明らかにしようとした。従来、1945年8月15日に至るまでの台湾史については、終戦間際は社会が混乱しており、アーカイブスが殆ど残っていないということもあり、これまでこの時期を本格的な研究対象とする研究者は少なかった。史料が乏しいにもかかわらず、小野会員は召集された兵士の個人情報や戦死した際の連絡先を記載した留守名簿を用いて、これまで戦争末期の学生動員及び特設警備大隊についての研究を発表してきた。今回発表された論稿は高砂特設警備部隊に着目し、同部隊の留守名簿である可能性が高い5冊を扱い、部隊の人員構成を整理するとともに、一事例ではあるが川中島社の例を名簿と照らし合わせた分析も行った。王会員からは焦点が極めて明確で実証的な研究であると評価された一方、植民地防衛体制とは何かについて具体的説明がほしいとも指摘された。例えば、軍は各地で防衛力をどう強化しようとしたか、高砂特設警備部隊がどのような役割を期待されていたか、この防衛体制を構築した人は誰なのか、また台湾総督府は軍にどのぐらい関与していたか、地域では官庁等がどう関わっていたか等、数点にわたって課題が提起され、これらを考察することの必要性が指摘された。掘り下げが足りないなどの問題は若干あったが、小野論文が終戦前後の台湾軍事史に関する研究に貢献したことは間違いない。今後が期待される。（王麒銘）

(2) 楊素霞報告は、1970年代後半以降（民主化移行期）の台湾における、台湾人による日本の「明治維新」を論じる言説の特徴を考察した。楊会員は台湾人による明治維新論についてこれまでにいくつかの論考を発表しており、本報告はその続編にあたる。楊会員は明治維新を論じた台湾人を3つの世代、すなわち①乙未戦争後新生代（1920年代に青少年期を過ごし台湾議会設置請願運動や台湾文化協会に参加した者）、②日本語世代（戦中派）、③戦後世代、に区分した上で、本報告ではとりわけ②の世代の明治維新論に着目した。具体的には張有忠、朱昭陽、陳逸松らの議論を考察し、彼らの明治維新論は、①の世代の集合的「明治維新」論が内包したような「抵抗」的要素を欠くものであったとの指摘がなされた。討論者からは、本研究の特徴は台湾人の明治維新「観」ではなく、個別の論者による明治維新「論」に着目している点に求められることから、教育や観光等の要素が絡む「集合記憶」の議論との接続は難しいのではないかと指摘がなされた。また、本報告は③の世代として取り上げられた李鴻禧および李永熾の議論を、「台湾を主体とする観点」からの明治維新論として整理していたが、これを「体制外の自由主義者による明治維新論」と見ることで、①と③の間に「憲政の要求を抵抗のロジックとする」という共通性を見出すことができないか、という問題提起がなされた。（家永真幸）

(3) “入室者”の動向をみれば、オンライン形式ゆえの“敷居の低さ”を差し引いたとしても、多くの会員の関心を集める主題であったという印象を受けた。その一方で、コメンテーターの質問や

指摘をもとに論点を詰めることはなかなか難しく、“フロア”から意見を徴して議論を深めるという展開にも及びづらかったことは、心残りである。接続トラブルに備えて事前にコメントーターの資料を報告者も含めて共有したことは、自由論題の分科会としては、これまでにない貴重なことであったように思われるだけに、より有機的な質疑応答の場を作り出せるよう今後の形を検討してみたいと思う。(北村嘉恵)

第9分科会
自由論題(文学・人類学)

富田哲(淡江大学)

座長: 富田哲(淡江大学)

報告: 沼崎一郎(東北大学)

「吉田修一『路(ルウ)』における平成日本から台湾への視線—現代日本語小説の中の「台湾」と「日本」(1)」

コメントーター: 藤野陽平(北海道大学)

沼崎一郎氏は、これまでの学術大会で人類学の視点から映画「KANO」「セデック・バレ」「海角七号」を論じてきたが、今回俎上にあげたのは吉田修一の小説『路(ルウ)』だった。2009年から2010年にかけて『文学界』に発表された同作は、その後単行本となり、また2020年にはNHKと公共テレビ台の共同制作でドラマ化されている。なお、沼崎氏はすでに『東方』480号でこのドラマを論じている。

沼崎氏は、人類学の分析概念である「視線」にくわえ、あらたに「視界」という概念をもちいて『路』を読みとこうとした。同作で日本から台湾に向けられる視線はもちろん批判的に分析される必要があるのだが、その日本からの視線は時間や空間に拘束されるほかないのであり、そうした制限のもとに広がる視界を問題化したいというのが沼崎氏の意図である。「平成日本」を生きる吉田が世に問うた同作と、人類学者が研究対象を観察、解釈したうえで記述する民族誌は案外接近しており、民族誌に対するのと同様の手法で小説を読むことも可能ではないかと沼崎氏は考える。

沼崎氏は『路』に、「震災視線と被災地視界」「回顧視線と追憶視界」「贖罪視線と和解視界」を見いだす。

「震災」とは1995年の阪神淡路大震災と1999年の台湾中部大地震である。震災視線は1990年代後半以降の、台湾と日本という被災地をうかびあがらせ、両地の関係性が多田春香と劉人豪のおたがいの思いをとおしてえがかれる。ただ、2000年代の日本という時空に拘束された吉田の視線がみとおす被災地視界には、日本統治期や民主化以前の台湾は入ってこない。

もっとも日本統治期自体は回顧の対象になっているのだが、そこにあるのは1968年生まれで、そしておそらく身内に台湾からの引揚者もいないであろう吉田自身の経験ではなく、旧制台北高校生だった葉山勝一郎をとおしての「湾生」の視線である。「追憶視界」には「兵隊もいなければ警官もいない。平穏な日常生活」があるだけである。

「贖罪」の視線を媒介するのは、葉山、高速鉄道建設にかかわる日本企業の駐在員安西誠、そして高雄にある高速鉄道の整備工場近くに住む張美青の日本人の元ボーイフレンドである。かれらはいずれも「台湾人を傷つける日本人」である。ただ台湾人に対する贖罪の視線から生まれる視界には、加害者と被害者という二者の関係しか存在せず、さらに加害者に対しても安易な赦しが与えられているように見えると沼崎氏は疑問を呈する。

なお、以上の視界の周囲には「中国の影」が随所にえがきこまれていることもつけくわえている。

報告に対し藤野陽平氏からは、民族誌批評の方法を小説に応用するにあたっては慎重な検討が必要であるとの発言があった。『路』を人類学研究のフィールドとすることは問題ないとしても、他の小説に対しても同様の手法をとれるとはかぎらない。また、『路』の視界に台湾の過去が入って来ない理由を、吉田の年齢や経験ゆえの限界とすることについても問題提起がなされた。すなわち、作者が意図的に限界を設定することもありうるのではないかということである。現実感をともなって知ることができないから視界に入っていないのではなく、それができたとしても視界からあえて排除している可能性がある。

この指摘には私もうなづかされた。ある時期まで、「親日台湾」をえがくためには日本統治期の濃厚な記憶が必要だった。その負のイメージもふくめて、「兵隊」や「警官」が視界に入ってくるのは不可避だったはずである。しかし今日ではより「安全に」利用できる素材があり、植民地期を回顧する必然性は薄れている。また、広範な読者に向けられる小説で「親日」を主題化するための材料を、戒厳令下の台湾から見つけることもむずかしいだろう。

報告後は、発言やチャットへの書きこみが数多くあり、『路』における日本人の視線、そこに広がる視界のありようや時を経た後の変化、問題点などが議論された。さらには『路』に対する台湾での反応、ドラマについて、台日関係とメディアの役割など話題は多岐におよんだ。「新しい台日関係」を想像する作品として、限定つきながらも『路』を評価する沼崎氏の分析が、参加者の研究関心や思索に訴えかけるものは少なくなかったようである。沼崎氏からは、みずからもふくむ研究者の問題としての時代的拘束性、すなわちポストインペリアル批評をこころみようとする意図そのものが、みずからが時代に拘束されていることのあらわれなのかもしれないという指摘があったが、こうした問題意識が「続編」にどう反映していくことになるのか、強い興味をいだかずにはいられない。

オンライン版
2020年リリース

臺灣日日新報 音声文化データベース

漢珍數位圖書 (Transmission Books & Microinfo)
総代理店:丸善雄松堂

『臺灣日日新報』は、日本統治期台湾の日常音楽生活と音声文化に関わる資料を豊富に含みます。本データベースは、『臺灣日日新報』に収録されている音楽関連の記事を収録し、総数は約357,200件にのびります。音や聴覚の視点から歴史を探求することが近年国際的に重要な潮流となるなか、日本統治期台湾の文化に「音」からせまるデータベースです。

収録期間：1898年-1944年3月31日
内 容：パフォーミング・アーツ、マスメディア、伝統行事など

全文検索の機能はありませんが、非常に詳細なキーワード検索（キーワードの総数2,650万以上）を備えています。購入型、年間購読型がございます。価格などの詳細はお問い合わせください。
 ※本データベースには、音声そのものは収録されていません。

M MARUZEN-YUSHODO 丸善雄松堂株式会社 学術情報ソリューション事業部 企画開発統括部
 〒105-0022 東京都港区海岸1-9-18 国際浜松町ビル TEL 03-6367-6114 FAX 03-6367-6160 e-mail: e-support@maruzen.co.jp

日本台湾学会活動報告

定例研究会

歴史・政治・経済部会（関東）

担当幹事：松岡格（獨協大学）

第148回日本台湾学会定例研究会活動内容

日時：2021年3月13日（土）14時～17時

場所：Cisco Webex Events を用いたオンライン開催

報告題目：「台湾出兵／牡丹社事件（1871-74年）をめぐって——研究史からのレビュー」

報告者：春山明哲（早稲田大学台湾研究所招聘研究員）

趣旨説明：松岡格（獨協大学国際教養学部准教授）

司会：新田龍希（早稲田大学台湾研究所次席研究員）

主催：早稲田大学台湾研究所

共催：日本台湾学会定例研究会

その他：無料・要事前登録

参加人数：42名

活動報告：

牡丹社事件ないし台湾開港以来同事件に至るまでの歴史過程は、近年の台湾における先住民族の歴史主体性の回復というアクチュアルな課題のなかで再び注目を集めている。本報告は伊能嘉矩以来日本語で発表されてきた台湾出兵／牡丹社事件研究を読みなおし、先行研究の知見をもとに事件の経緯を再構成することで、先行研究の問題点及び今後明らかにすべき論点を提示するというものであった。

台湾出兵については既に図書雑誌約80点が出版されており、分野別にみれば政治史、外交史がいまだ主流だが、台湾原住民、琉球沖縄史、軍事史、経済史、メディア史などの領域からも研究が進められてきた。

春山氏は先行研究を精査し、以下の課題を指摘した。①遭難者は誰なのか、②加害者は誰か、殺害の理由は何か、③「内治派」の大久保利通が台湾出兵を進めた理由、④大久保の北京交渉と国際法をめぐる状況の整理などである。最後に、春山氏は大久保の北京交渉と国際法（万国公法）の問題を取り上げ、ルジャンドルの国際法解釈、ポアソナード意見書などについても簡潔に考察した。

出席者からは大久保の国内出張中に大隈重信・西郷従道が台湾出兵・台湾植民地化構想を推進したという理解の妥当性や、台湾出兵後の互換条款と清の台湾島全島に対する主権との関係などについて質問が寄せられ、更なる研究上の課題が浮き彫りになった。（記録：魏逸瑩）

第149回日本台湾学会定例研究会活動内容

日時：2021年3月19日（金）16時～18時

場所：Cisco Webex を用いたオンライン開催

題目：「1970年代東アジア国際秩序の変容と中台関係—『蔣経国日記』を手がかりに」

モデレーター：松田康博（東京大学）

報告者：福田円（法政大学）

コメンテーター：清水麗（麗澤大学）・五十嵐隆幸（防衛大学校）

共催：法政大学ポアソナード記念現代法研究所「現代国際秩序における正統性の相克」プロジェクト、科学研究費補助金・国際共同研究加速基金「『一つの中国』コンセンサス形成と台湾（17KK0053）」

参加人数：約 50 名

活動報告：

2020 年 2 月、スタンフォード大学フーバー研究所は、遺族から貸与された『蔣経国日記』の一般公開を開始したが、新型コロナウイルス流行の影響をうけ、同研究所の文書閲覧室は 2020 年 3 月以降、外部に非公開となっている。

企画者である福田は、2020 年 3 月から訪問学者として同研究所に在籍し、内部の研究者として、時間をかけて同『日記』を閲覧する機会に恵まれた。その成果を、日本の学界にて関心を持つ研究者と共有し、その史料価値やその内容から言えることについてさらに議論を深めるために、上記のようなワークショップを企画した。

ワークショップにおいては、福田がまず、閲覧・複写した『日記』の内容を紹介しながら、1970 年代に国際的に孤立することとなった台湾において、蔣経国が 1) 強硬な原則の提示、2) 具体的手段やタイミングに関する譲歩、3) 譲歩を正当化し、内部の正統性を担保するための国内体制強化、というステップを繰り返しながら、1979 年に米国との断交を迎えたことを指摘した。加えて、各々の政策決定において、蔣経国は台湾の孤立を深刻化させるような事態が起きることは予測しつつも、それを遅らせることを重要視していたこと、国際的な交渉で何かを勝ち取るよりも、中国共産党との内戦の論理を優先していたことなどを指摘した。これらの論点や、この『日記』を史料としていかに活用するかについて、モデレーターやコメンテーターを中心に活発な議論が交わされた。（記録：福田円）

定例研究会

台北

担当幹事：田島真弓（専修大学）、報告：冨田哲（淡江大学）

第 85 回台北定例研究会

日時：2021 年 4 月 24 日（土）13:00～

場所：台湾大学台湾文学研究所

報告者：陳培豊（中央研究院台湾史研究所）

テーマ：台湾語演歌の物語—異なる節回しの国語、台語流行歌

コメンテーター 張文薰氏（台湾大学台湾文学研究所）

使用言語：日本語

※第 86 回を 5 月 22 日に予定していたが、COVID-19 感染拡大のため中止。

第 86 回台北定例研究会

日時：2021 年 9 月 17 日（金）15 時～

場所：国立台北教育大学 A605

報告者：三代川夏子氏（東京大学博士課程、国立政治大学訪問学者）

テーマ：冷戦期自民党議員外交と日台間チャンネル

コメンテーター：徐浚馨氏（淡江大学日本政経研究所）

使用言語：日本語

学会運営関連報告

川上桃子（アジア経済研究所）

第11期理事会 第6回常任理事会 議事録（抄）

日時 2021年3月7日（日）13:00-18:00
場所 オンライン開催（Webex）
出席 松田康博（理事長兼第23回大会実行委員長）、北波道子（副理事長）、赤松美和子、家永真幸、大東和重、上水流久彦、川上桃子、洪郁如、富田哲、三澤真美恵、山崎直也（以上、常任理事）
欠席 菅野敦志（委任状）
主宰 松田康博理事長
書記 明田川聡士

報告

1. 理事長・事務局

- (1) 松田理事長
特になし。
- (2) 川上総務担当理事
第12期理事会選挙への対応について報告がなされた。

2. 各業務担当

- (1) 川上総務担当理事（①理事選挙結果について ②学会賞選考について）
 - ①第12期理事会選挙結果について報告がなされた。
 - ②学会賞選考委員会による第11回日本台湾学会賞の選考結果について報告がなされた。
- (2) 山崎会計財務担当理事
配付資料にもとづき、第11期第5回常任理事会（2020年12月6日）後の主な支払いについて報告がなされた。
- (3) 福田広報担当理事（川上常任理事による代理報告）
配布資料にもとづき、学会ホームページ、学会ブログ、メーリングリスト登録状況、サーバーの契約更新等の運用状況について報告がなされた。
- (4) 大東ニュースレター担当理事
「ニュースレター」（第40号、2021年4月発行予定）の編集状況について報告がなされた。ニュースレターは、現在第40号を編集中であり、特集は「台湾の変化を感じたとき」とした。依頼していた原稿はほぼ届き、まもなく著者校正が始まる予定である。発行は4月上旬、配信は3月末を予定している。
- (5) 上水流編集委員長
『学会報』（第23号、2021年6月発行予定）の編集状況について報告がなされた。例年通り6月中の発行に向けて準備を行っている。
- (6) 富田企画委員長
配布資料にもとづき、学術大会（第23回、2021年5月開催予定）の準備状況について報告がなされた。
- (7) 菅野国際交流担当理事（川上常任理事による代理報告）
配布資料にもとづき、対外発信強化プロジェクトおよびIJTS（International Journal of Taiwan Studies）誌との連携協力について報告がなされた。
- (8) 洪文献目録担当理事
「戦後日本における台湾関係文献目録」について報告がなされた。2021年3月7日現在の総レコード数は、全件18,499件、2019年12月以来日本台湾交流協会ホームページでの更新はない。2020年10月～2021年3月分の文献目録については、2021年3月末に送付予定である。
- (9) 定例研究会担当幹事
関東（川上常任理事による代理報告）、関西（北波副理事長による代理報告）、台北（富田常任理事による代理報告）での定例研究会について報告がなされた。

3. その他

(1) 上水流常任理事

IJTS 誌への英語書評について報告がなされた。英語書評については編集委員会で選定し、依頼を行った。その費用については、翻訳代にあてる場合は1万円を上限、校閲の場合は1万円前後ということで常任理事会の了承をメール審議で得ている。

議題

1. 第23回学術大会について

(1) 準備状況について（松田実行委員長、富田企画委員長、山崎実行委員、赤松実行委員）

配布資料にもとづき、実行委員会および企画委員会より大会準備状況について確認がなされた。審議の結果、承認された。なお、オンライン開催ではあるが、報告者には集中して報告、参加して頂くために例年通り託児施設利用時の補助を行うことに決まった。

(2) 大会予算案について（五十嵐実行委員：松田実行委員長による代理報告）

配布資料にもとづき、実行委員会より大会予算案について確認がなされた。審議の結果、承認された。

2. 日本台湾学会賞規定の改正案について（三澤常任理事）

配布資料にもとづき、日本台湾学会賞の規定等に関する審議がなされた。審議の結果、日本台湾学会賞の改訂にあわせて、日本台湾学会学術賞（新規）、日本台湾学会特別賞（新規）を設置することが承認された。

3. 賛助会員へのサービスについて（川上常任理事）

配布資料にもとづき、賛助会員サービスの拡充案について審議がなされた。審議の結果、承認された。

4. 「戦後台湾関係目録」の廃止について（洪常任理事）

配布資料にもとづき、「戦後台湾関係目録」の廃止について審議がなされた。審議の結果、継続審議となった。

5. 会員の入退会、シニア会員への移行について（川上常任理事）

特になし。

6. その他

(1) 理事会日程について

理事会は2021年5月22日（土曜日）日本時間10時よりWebexで開催することに決まった。

(2) 会費のクレジットカード決済について

年会費や大会参加費の徴収に際し、クレジットカード決済を導入してはどうかという意見が出された。

(3) オンラインストレージの導入について

情報共有、アーカイブのためにオンラインストレージを導入してはどうかという意見が出された。

以上

第12期理事会 第1回常任理事会 議事録（抄）

日時 2021年7月30日（金） 09:00-13:15

場所 Webex オンライン会議

出席：松田康博（理事長）、北波道子（副理事長）、赤松美和子、家永真幸、大東和重、川上桃子、洪郁如、富田哲、福田円、松金公正、山崎直也（以上、常任理事）。

五十嵐隆幸（第23回学術大会会計担当）

欠席：上水流久彦、菅野敦志

主宰：松田康博（理事長）
書記：五十嵐隆幸（幹事）

報告

1. 理事長・事務局

- (1) 松田理事長
特になし。
- (2) 川上事務局担当理事
特になし。

2. 各業務担当

- (1) 川上総務担当理事
入会申請書の性別欄を無くすことで準備を進めている。
- (2) 山崎会計財務担当理事
配付資料にもとづき、第12期第1回理事会（2021年5月22日）後の主な支払いについて報告がなされた。なお、現在、学会費のクレジットカード払いについて検討を進めている。
- (3) 福田広報担当理事
配付資料にもとづき、学会ホームページ、学会ブログ、メーリングリスト登録状況、サーバーの契約更新等の運用状況について報告がなされた。
- (4) 赤松ニューズレター担当理事
今秋発行予定のニューズレター第41号の編集状況について報告がなされた。特集記事の第23回学術大会成果報告については、原稿がほぼ届き、まもなく編集作業を本格化する。
- (5) 松金編集委員長
発行準備中の『日本台湾学会報』第23号において、誤りが見つかった。修正について正誤表を出し、PDF化の際には修正してHPに掲載する。
- (6) 富田企画委員長
配付資料にもとづき、第23回学術大会について報告がなされた。
- (7) 菅野・洪国際交流担当理事
配布資料にもとづき、対外発信プロジェクト（優秀学会賞論文の英訳支援）、IJTSへの書評推薦など、国際交流担当事業について報告がなされた。
- (8) 洪文献目録担当理事
戦後日本における台湾関係文献目録について報告がなされた。今後について、引き続き、日本台湾交流協会と話し合う予定である。

3. その他

特になし。

議題

1. 第23回学術大会について（松田第23回学術大会実行委員長）
第23回学術大会（オンライン：2021年5月29日、30日）について報告がなされた。
2. 第23回学術大会決算報告（五十嵐第23回学術大会会計担当）
配布資料にもとづき、第23回学術大会決算報告がなされ、決算案は承認された。
3. 第23回学術大会シンポジウムについて（山崎第23回学術大会シンポジウム担当）
第23回学術大会のシンポジウムについて、大会後の動画公開を含めて報告がなされた。
4. 第24回学術大会について（福田第24回学術大会実行委員長）
第24回学術大会の開催について、今後の流れに関する確認がなされた。日程については、2022年5月28日（土）、29日（日）とし、開催方式は引き続き検討していく。
5. 第24回学術大会分科会企画・自由論題報告の募集要領について（富田企画委員長）
配布資料にもとづき、第24回学術大会分科会企画・自由論題報告の募集要領について審議し、今後の流れに関する確認がなされた。
6. 『日本台湾学会報』第24号の投稿および原稿執筆要領等について（松金編集委員長）

配布資料にもとづき、学会報への投稿要領等について審議がなされた。レフェリーのコメントについて、現行の日本語および中国語以外に英語を認めることで承認された。

7. 『日本台湾学会報』のJ-Stage 登載について（松金編集委員長）
将来的なJ-Stage 掲載を見込み、その利用資格で示された査読規定などの検討を進める。
8. 学会ウェブサイトの改革について（福田広報担当理事）
学会ウェブサイトのリニューアル案に関して、現状の検討状況について説明がなされた。現行のウェブサイトの更新には習熟が必要な状態また、今年度中にウェブサイトの改革を進めるための予算措置の必要性について合意した。であるため、担当者が変わっても負担なく更新が続けられるように改善することで合意がなされた。また、今年度中にウェブサイトの改革を進めるための予算措置の必要性について合意した。
9. 学会ロゴマークの作成について（赤松担当理事）
配布資料にもとづき、現在の検討状況について報告がなされた。また、今後の流れについて確認がなされた。
10. 会員の入退会について（川上総務担当理事）
入会申請5件、シニア会員への移行1件が承認された。
11. 次回常任理事会の日程について（川上総務担当理事）
ワークライフバランスを考慮し、12月の週末以外（金曜日等）での実施を追求する。

以上

常任理事会からのお知らせ

<学会ホームページ大幅刷新に関する追加支出の理事会承認について>

学会ホームページ（HP）につきましては、かねてより、学会活動の拡充やページ数の増加に伴い、刷新の必要性が高まっており、2021年度の予算案で「ウェブサイト拡充費」として30万円を計上し、2021年5月の理事会、会員総会でご承認をいただいております。

その後、常任理事会では、コロナ禍の先行きが依然として不透明ななか、活動の拡充と機動的な情報発信のために、今年度のうちに、HPの大幅な刷新に着手する必要があると判断するにいたりました。学術大会や定例研究会等をオンラインで開催するようになったことで、学会活動に占めるHPの重要性が高まり、更新頻度も増加していること、22年度大会についてもオンライン開催となる可能性があるためです。

このたび、常任理事会では、広報担当理事を中心に、複数の業者と折衝した結果、69万円の追加予算の支出案と関連資料を理事会に提出し、2021年8月28日にメール審議にて承認されました。更新作業は、ストリームグラフ社に委託し、2021年中の作業終了を予定しております。

当初予算を大きく上回ることとなりましたが、会員の皆様におかれましては、ご理解のほどよろしくお願いいたします。

以上

***** 編集後記 *****

・本号は2021年5月29日(土)／30日(日)の両日にオンラインにて開催された、第23回学術大会の特集としてお届けいたします。新型コロナウイルス流行を受けて、公開シンポジウムは、Vimeoによる動画配信およびWebex Meetingsによる開催、分科会もWebex Meetingsでの開催となりました。

・次号42号(2022年4月発行予定)では、特集「台湾／日本に行けない台湾研究」を組む予定です。日台の距離は比較的近いので、これまでは気軽に往来して社会観察や研究を積み重ねられておられたと思います。ところが2020年3月以降、コロナ禍のために、台湾／日本への渡航がかくも遠い夢のようになってしまいました。次号特集では、台湾／日本に行けない状況下で、皆さんがどのように台湾(日台)研究に取り組んでおられるかを語っていただきます。例えば、オンライン学会参加体験記、オンライン授業実践報告、あらためて感じる対面〇〇の意義など真面目な内容から、恋しくて仕方がない台湾／日本のあの味・あの店・あの場面、往来可能後最初にしたいこと・会いたい人、台湾／日本ロス解消方法など、カジュアルなエッセイも大歓迎です。あるいは、美酒美食の無い・現場に行けないおこもり研究生活の利点・不満・モチベーションの保ち方、リモート研究の新しい方法・可能性・着想などを紹介いただき、研究者間での情報交流の場にもなれば幸いです。以上のような内容のエッセイの、会員の皆様による投稿を歓迎いたします。ご関心のある会員は、編集担当赤松・八木の下記アドレスまでご連絡ください。字数等フォーマットをお知らせいたします。

・ニュースレターは会員による情報交換の場でもあります。台湾と関わるシンポジウム・研究会・展示等の参加記や、学術交流の動向など、積極的なご投稿をお願い申し上げます。

・学術大会のオンライン開催に伴い、賛助会員となっておられます書店の広告を、本号よりニュースレターに掲載いたします。そのため組版を変更いたしました。

・5年にわたり読み応え満点のニュースレターを発信された大東和重編集長に代わり、本号より赤松美和子・八木はるなが編集を担当いたします。引き続きどうぞよろしくお願いいたします。

(赤松美和子・八木はるな)

日本台湾学会ニュースレター 第41号

発行：日本台湾学会(代表 松田康博)
発行年月：2021年10月

■日本台湾学会事務局

〒261-8545 千葉県千葉市美浜区若葉3-2-2
アジア経済研究所気付

E-mail: nihontaiwangakkai@gmail.com

■ニュースレター発行事務局

〒102-8357 東京都千代田区三番町12
大妻女子大学比較文化学部 赤松美和子研究室気付

E-mail: akamatsu.miwako@otsuma.ac.jp
harunayg@gmail.com